

イラン南ホラーサーン州、カレ・クブ遺跡の第1次調査 —イラン東部最古の農耕村落を求めて—

安倍 雅史 東京文化財研究所研究員
ホセイン・アジジ・ハラナギ イラン国立博物館先史部門長

Excavations at Kale Kub in South Khorasan, Iran: Looking for the Oldest Neolithic Site in Eastern Iran

ABE, Masashi Researcher, the Tokyo National Research Institute for Cultural Properties
KHARANAGHI, Hossein Azizi Head of the Department of Prehistory, the Iran National Museum

イラン南ホラーサーン州、カレ・クブ遺跡の第1次調査—イラン東部最古の農耕村落を求めて—

1. 発掘調査の背景と目的

西アジアの「肥沃な三日月地帯」は、地中海型農耕(ムギ作農耕とヒツジ・ヤギ飼育)の起源地として知られている。過去、40年間、肥沃な三日月地帯の西翼をなすレヴァント(トルコ、シリア、レバノン、パレスチナ、イスラエル、ヨルダン)では新石器時代を対象とする考古学研究が飛躍的に進展を遂げた。一方、東翼をなすザグロス(イラク東部、イラン西部)では、不安定な政局の影響を受け、考古学研究が著しく停滞してきた。この結果、1990年代までには、地中海型農耕はレヴァントに起源し、ザグロスには比較的新しい時期になってから農耕が西方から伝播してきたとする学説(レヴァント単一起源説)が考古学会で形成された(e.g. 藤井 2001)。

しかし、今世紀に入り、この学説は大きく揺らぎ始めている。例えば、近年、急速に発展を遂げた遺伝子研究は、ザグロスの重要性を指摘している。2007年には、ユーラシア大陸各地の現生の野生・栽培大麦を対象に遺伝子研究が行われ、世界には大麦の系統が2系統あり、ヨーロッパ、アフリカで栽培されている大麦はレヴァントに自生している野生種を祖先とし、東アジア、中央アジアで栽培されている大麦はザグロスの野生種を祖先にしている可能性が指摘された(Morrell and Clegg 2007; Saisho and Purugganan 2007)。また2008年には、ユーラシア大陸各地の現生の野生・家畜ヤギの遺伝子が研究されたが、世界で最初にヤギの家畜化が進行した地域は、レヴァントではなくザグロスであった可能性が指摘された(Naderi et al. 2008)。また、エンマー小麦に関しても、ザグロスとレヴァントの野生種が交配したものが、現生の栽培エ

ンマー小麦の祖先であると指摘されている(Ozkan et al. 2005)。このように遺伝子研究は、ザグロスでも独自にヤギの家畜化、大麦、小麦の栽培化が進行した可能性(多地域起源説)を示している。

また、今世紀に入り、ザグロスを対象とした考古学調査が再開され、ザグロスの新石器時代に関連して大発見が続いている。2013年には、イラン・ザグロスにあるチョガ・ゴラーン(Chogha Golan)遺跡で発掘調査を行ったドイツ・イラン隊が、この遺跡で麦の栽培がレヴァントと同様に前1万年近くにまで遡る可能性があることを指摘し、学会の注目を集めている(Riehl et al. 2013)。さらに2016年には、イラン・ザグロスの新石器時代の遺跡から出土した古人骨からDNAを抽出し現代の人間集団と比較した結果、新石器時代にザグロスに居住した人間集団が、現在、イランから南アジアにかけて暮らす人々の祖先にあたる可能性が示され、ザグロスがレヴァントとともに、農耕の起源地であったこと、またザグロスの初期農耕民が農耕の技術を携え東方に拡散していった可能性が高いことが明らかになっている(Broushaki et al. 2016)。

このようにザグロスは、レヴァントと並び、現在、地中海型農耕の起源地として注目されるようになってきている。筆者の一人(安倍)も、2011年よりイランに入り、ザグロスの新石器時代から出土した遺物を中心に資料調査を進めてきた。2018年からは、ザグロスで誕生したザグロス型の農耕文化がどのように東方に拡散していったのか、そのプロセスを研究するため、研究の空白地域であったイラン東部の南ホラーサーン州をフィールドに考古学調査を開始した。

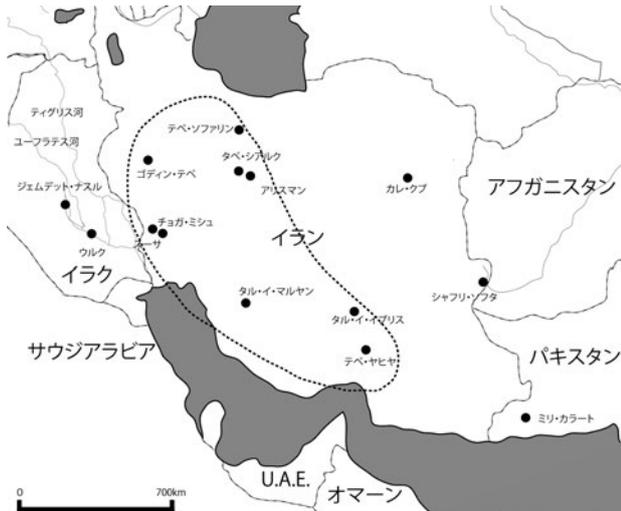


図1 カレ・クブ遺跡の位置(点線はプロト・エラム文化が広がった範囲)

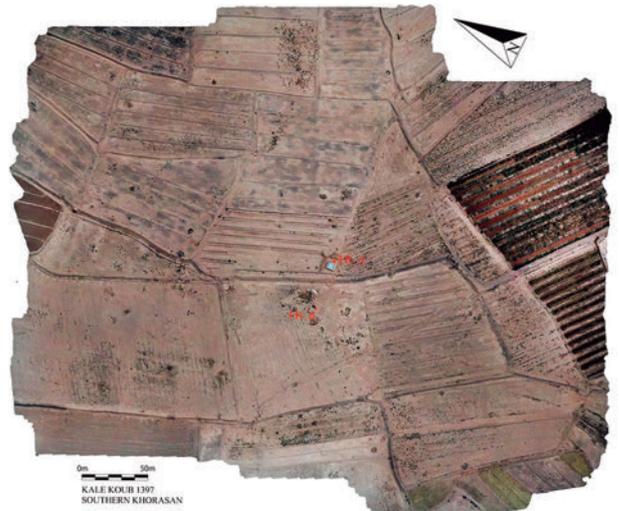


図3 カレ・クブ遺跡



図2 カレ・クブ遺跡トレンチ A

2. カレ・クブ遺跡の第1次調査： イラン東部最古の農耕村落を求めて

カレ・クブ(Kale Kub)遺跡は、南ホラーサーン州の州都ビールジャンドから北西140 kmにあるアイアスク(Ayask)村、その西方800 mに位置する遺丘である(図1、2)。遺丘の大きさは7 haと中規模だが、現在は、農地として使用され地表面が大きく削平されている(図3)。

発掘を実施する前から、この遺跡では、押圧剥離によって剥離されたチャート製の細石刃や細石刃石核が表採されていた。ザグロスでは、こうした石器類は、先土器新石器時代や土器新石器時代前半といった新石器時代のなかでも古い時期に特徴的な石器である。そのため、カレ・クブ遺跡にも古い新石器時代の層があることが予想され、イラン東部最古の農耕村落を発見することを目的に、発掘調査を実施した。

今回の調査では、遺丘の中央にトレンチ A(2 m×2 m)とトレンチ B(2 m×2 m)の二つのトレンチを設け発掘した(図2、3)。トレンチ A では地表から5 m掘り下げた段階で、トレンチ B では地表から4.5 m掘り下げた段階で、遺物の出ない地山に到達した。しかし、両者とも地山の直上の層から、新石器時代と銅石器時代の移行期に相当するチャシュメ・アリ(Cheshmeh Ali)文化(前5200年～前4800年)の土器片が出土し(図4)、残念ながら、カレ・クブ遺跡では、農耕の拡散プロセスを研究できるような古い新石器時代の層を見つけることはできなかった。

遺跡で表採された細石刃石核と細石刃は、ザグロスとは異なり、南ホラーサーン州では、新しい時代まで残存している可能性も考えられ、今後の検討課題としたい。



図4 カレ・クブ遺跡から出土したチャシュメ・アリ期の土器片(下3点)

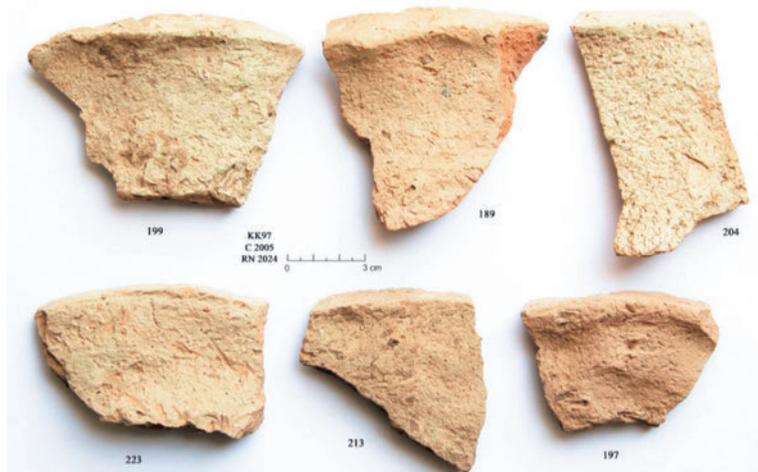


図5 カレ・クブ遺跡から出土した外傾口縁鉢(ベベルド・リム・ボウル)

3. 最果てのウルク文化の遺跡か？ あるいは最果ての プロト・エラム文化の遺跡か？

しかし、今回の調査において、きわめて重要な発見があった。トレンチA、トレンチBそれぞれ表土下1.5 m、1 mのところに厚さ50 cmほどの礫層があり、この礫層から大量の外傾口縁鉢(ベベルド・リム・ボウル、Beveled Rim Bowl)が出土したのだ(図5)。

この外傾口縁鉢は、南メソポタミアのウルク文化(Uruk文化(前4000年～前3100年))を代表する遺物であり、パン焼き用あるいは食糧分配用の土器であったと解釈されている。また、カレ・クブ遺跡からは、このほかにも粗製盆(Low Sided Tray)や四耳壺(Nose Lugged Jar)といったウルク文化を代表する器種も出土している(図6)。

では、なぜ南メソポタミアのウルク文化の土器群が、



図6 カレ・クブ遺跡から出土した四耳壺の把手破片

南メソポタミアから1000 km以上離れたイランの南ホラーサーン州から発見されたのだろうか？

ウルク期に、現在のイラク南部に世界最古の文明メソポタミア文明が誕生したことが知られている。ウルク期の後半になると、ウルク文化の物質文化は、南メ

ソポタミアを超え、南東アナトリアやシリア、北メソポタミア、イラン高原などの周辺地域に広がっていく。南メソポタミアは、ユーフラテス河、ティグリス河が運んだ泥が堆積してできた広大な沖積平野のため、文明生活を営む上で必要な鉱物資源や貴石といった資源がほとんど存在しない。そのため、こうした資源を周辺地域から獲得するため、南メソポタミアの都市国家群が競って周辺地域に進出していった結果、ウルク文化の物質文化が広がっていったと解釈されている (Al-gaze 1993)。

いままでウルク文化の物質文化が確認された最北東の遺跡は、イラン高原のタペ・シアルク (Tappéh Sialk) 遺跡やアリスマン (Arisman) 遺跡、テペ・ソファリン (Tepe Sofalin) 遺跡であった (図 1)。カレ・クブ遺跡は、ウルク文化の土器群が発見された最北東の例であり、今回の発見によって、ウルク文化の広がり、さらに東へ 600 km 広がることとなった。

カレ・クブ遺跡から出土したウルク文化の土器群はどのように解釈できるのだろうか？ 1. 在地集団がウルク文化の物質文化を取り入れた、2. この遺跡に南メソポタミアから来た商人の居留地が存在した、あるいは 3. シリアのハブーバ・カビーラ (Habuba Kabira) のような本格的な南メソポタミアの植民集落が存在したなど、さまざまな仮説が考えられるが、今後の調査課題としたい。

また、これらの土器群は、ウルク期のものではなく、プロト・エラム (Proto Elam) 期 (前 3100 年～前 2900 年) のものである可能性もある。外傾口縁鉢や四耳壺、粗製盆といった土器群は、次のプロト・エラム期にも引き継がれたことが知られている (Mutin 2013; Petrie 2013)。プロト・エラム期の物質文化は、これらの土器群のほかプロト・エラム文字で書かれた粘土版などを特徴とする。プロト・エラム文化は、イラン西南部のスシアナ平原で誕生し、ザグロスやイラン高原西部を中心に広がったと考えられている (図 1)。ウルク期の終わりに交易ネットワークが崩壊した後、南メソポタミアに物資を供給し続けるため、スシアナ平原にあったスーサ (Susa) が中心となって再度、交易ネットワークを構築した結果だと考えられている (Lamberg-Karlovsky 2013)。カレ・クブ遺跡から出土した土器群がプロト・エラム期のものであった場合でも、カレ・クブ遺跡はプロト・エラム文化の物質文化が確認された最北東の遺跡となる。

世界で 2 番目に古い文字とされるプロト・エラム文

字は、いまだ 1 割～2 割程度しか解読されていない。プロト・エラム文字粘土板は現段階では 8 遺跡からしか出土していない (Mutin 2013)。カレ・クブ遺跡の大きさは 7 ha と決して大きくはないが、プロト・エラム文字粘土板が大量に出土したスーサの当時の規模が 11 ha 程度だったことを考えると、カレ・クブ遺跡からも将来的にプロト・エラム文字粘土板が出土することは十分期待できる。

4. おわりに

イラン東部最古の農耕村落を見つけるという意味では、今回の調査は空振りに終わった。しかし、今回、カレ・クブ遺跡は、イランの文明形成期を考えるうえで極めて重要な遺跡であることが判明した。

今後、前 4 千年期後半／前 3 千年期初頭の層に的をしぼり、本格的な発掘調査を実施する予定である。

なお、この調査は、科学研究費助成事業基盤研究 (C)「ザグロス地域における農耕・牧畜の起源に関する考古学的研究 (研究課題／領域番号 17K03228)」による成果の一部である。

■参考文献

- ・藤井純夫 2001 『ムギとヒツジの考古学』 同成社。
- ・Al-gaze, G. 1993 *The Uruk World System: The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago, the University of Chicago Press.
- ・Broushaki, F. et al. 2016 Early Neolithic Genomes from the Eastern Fertile Crescent. *Science* 353(6298): 499-503.
- ・Lamberg-Karlovsky, C. C. 2013 Iran and Its Neighbors. In Crawford, H. (ed.) *The Sumerian World*, pp. 559-578. London, Routledge.
- ・Morrell, P. and M. Clegg 2007 Genetic Evidence for a Second Domestication of Barley (*Hordeum vulgare*) East of the Fertile Crescent. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 104/9: 3289-3294.
- ・Mutin, B. 2013 *The Proto-Elamite Settlement and Its Neighbours: Tepe Yahya Period IV C*. Oxford, Oxbow Books.
- ・Naderi, S. et al 2008 The Goat Domestication Process Inferred from Large-scale Mitochondrial DNA Analysis of Wild and Domestic Individuals. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 105/46: 17659-17664.
- ・Ozkan, H. et al. 2005 A Reconsideration of the Domestication Geography of Tetraploid Wheats. *Theoretical and Applied Genetics* 110(6): 1052-60.
- ・Petrie, C. A. (ed.) 2013 *Ancient Iran and Its Neighbours: Local Developments and Long-Range Interactions in the Fourth Millennium BC*. Oxford, Oxbow Books.
- ・Riehl, S., Zeidi, M. and N. J. Conard 2013 Emergence of Agriculture in the Foothills of the Zagros Mountains of Iran. *Science* 341/6141: 65-67.
- ・Saisho, D. and M. Purugganan 2007 Molecular Phylogeography of Domesticated Barley Traces Expansion in the Old World. *Genetics* 177(3): 1765-1776.